2015 年度　川上宏奨学基金報告書

2015 年度川上宏奨学基金をいただき、卒業論文「役割期待と『ありのまま』: 40 代女性の自己呈示」を書きあげることができた。この内容と調査方法を報告する。

１．卒業論文の要旨

卒業論文では、「40 代の女性はどのような時に『ありのまま』の自分と感じているのか」という問いを調査すべくインタビュー調査を行い、そのデータをもとに分析を行った。調査では、30 代から 60 代の女性 9 人にインタビューを行った。春の 1 期調査では、仕事をしている 5 人、夏から秋にかけての 2 期調査では専業主婦である 4 人にインタビューに協力していただいた。インタビューは IC レコーダーで録音し、これを文字起こししたものをデータとした。また、40 代女性の特徴をより明確にするため、3 年次に同様のテーマで女子学生 5 人にインタビューを行った際のデータも使用した。卒業論文では調査協力者を「40 代女性」と定義したので、本報告書でも同様に調査対象者のことを 40 代女性とする。

化粧や服装といった「よそおい」の面から見ると、40 代女性が化粧をするかどうかは、「ウチ」と「ソト」という軸によって決まっていた。40 代女性は、家の中、つまり「ウチ」から出る時は必ず化粧をする。化粧をせず行くソトは、ゴミ捨て場やごく近所のスーパーマーケットに限られているし、その場合はなるべく人との接触を避け、社会的場面に発展しないようにしている。このことは服装にもおおむね共通している。一方、女子学生の化粧には、身だしなみという軸ではなく「ハレ」と「ケ」という要因や、化粧をする時間があるかどうかという要因も強い影響力を持っており、あくまでオプション的なものである、という違いが見られた。

ふるまいの変化という面からみると、仕事をしているときや友人、母親といった役割において、役割期待による「ふるまい圧力」がおこる場合に変化が起こっていた。

仕事におけるふるまいは、「状況に合ったもの」という規範によって行われている。このふるまいの使い分けがもっともはっきり見られたのは、「先生」と呼ばれる役割に就いている場合だった。「先生」と呼ばれる役割は、教室内だけではなく、たとえば買い物先で偶然生徒や生徒の親に会った場合にも必要とされるものである。そのため、「どこで会っても先生」であることが要求される。「先生」にかかるふるまい圧力によって、当該の調査協力者は自身のふるまいを変化させる必要があると判断していた。先生以外の役割では、友人を相手に仕事をしている人が、役割期待によってふるまいを変化させていた。例えば、友人を相手に下着の訪問販売を行う場合、商品の話をしているときは販売員として一線を引き、それが終われば友人として普段通りにふるまう。販売員として求められるふるまいと友人として求められるふるまいは別だが、それぞれの要求に応えるべくふるまいを変化させている。また、母親という役割でも、ふるまい圧力による変化が見られた。母親として、子どもの前では常にお手本となるようなふるまいを心がけているが、家に子どもがいないとそれがくずれることがあるのだ。以上の役割に共通するのは、役割期待によるふるまい圧力を感じていることである。この圧力が、役割に合わせたふるまいへとつながる。

40 代女性が「ありのまま」で過ごしていると感じるのは、学生時代の友人の前、親の前で娘として過ごしているとき、妻として夫と過ごしているときなどであった。これらに共通しているのは役割期待からくるふるまいへの圧力があまりないことであった。求められるふるまいがあまりないことから、「ありのまま」の自分を自己呈示することが可能になる。つまり、「ありのまま」という感覚は、関係性によって決定されるものである。

以上のことから、40 代女性は、よそおいではウチとソトという軸、ふるまいでは役割期待によるふるまいへの圧力という軸を基準に自己呈示を行っているといえる。「ありのまま」の自分はふるまいへの圧力からの解放が関わっており、ふるまいへの圧力があまりない役割に関係している人といるときに、「ありのまま」の自分として過ごしていた。

２．奨学金の主な用途

インタビューを録音しデータとする際、より聞き取りやすいデータを得るため、IC レコーダーを購入した。また、大学図書館での資料のコピー代と調査協力者への謝礼にも使用した。さらに、11 月と 12 月にはアルバイトの時間を減らして、卒業論文により多くの時間を割くことができた。

３．卒業論文を書き終えて

40 代女性は母親や仕事をするという役割を持っており、その役割によって自身のふるまいが変化することが分かった。特に、「母親」や「妻」といった、女子学生ではほぼ見られない役割についてお話を伺えたことで、40 代女性だからこそ起こる役割期待やふるまいの変化について調査できた。学生、40 代女性と調査を行って、70 代以上の女性ではどのような自己呈示が行われているのか興味が湧いたので、機会があれば調査したい。

最後に、卒業論文を書くにあたり、後押ししてくださった故川上宏先生とご家族の皆様、指導してくださった南保輔先生、調査に協力してくださった皆様に、感謝とお礼を申し上げます。